

- らまし」]「あのしょ〔人〕もヨバツテ来^ケィや〔よべ〕」
- ヨム (ヨッダ / マナ^イ) 〔自〕木の実などがよく熟す [富山県高岡・石川・福岡]「カ
キの実がよォヨンデうまーそげ^アだてば」
- ヨロオ・ヨロウ (ヨロッタ / ワナ^イ) 〔他〕(1)さわる, ふれる「子ども方^{かた}にわヨロワセ
ナイバいい」 [新潟県全般; イロウ関西・九州など, イラウ愛知額田郡・西日本]
「めしをよそう [《古》トリヨロフ?「充足させる」の意味からか]
- ンダカル (ンダカッタ / ラナ^イ) 〔自〕糸がもつれる [ウンダケル富山, モドカル富山
婦負郡・福井坂井郡]

*

*

*

参 考 文 献

- 1720 仙台言葉以呂波寄 (猪苗代^{けんいく}兼郁)
- 1767 庄内浜荻 (堀^{ときかつ}季雄)
- 1775 物類称呼 (越谷吾山)
- 1790 御国通辞 (服部武喬・南部藩士)
- 幕末 仙台浜荻 (伊達家侍女・匡子)
- 明治初 加賀なまり (竹中邦香)
- 1892 越佐方言集 (田中勇吉)
- 1937 越後方言考 (小林 存・1975 覆刻)
- 1951 全国方言辞典 (東条 操・東京堂)
- 1954 標準語引分類方言辞典 (同上)
- 1966 全国方言資料 (金田一春彦・柴田 武・日本放送協会)
- 1973-74 新潟県方言辞典・上越編・佐渡編 (渡辺富美雄・野島出版)
- 1971 信州の方言 (馬瀬良雄・第一法規)
- 1984 なかじょうのことば (板倉 功・胎内印刷)
- 1985 秋山郷のことばと暮らし (馬瀬良雄・第一法規)

(TAKEBA Ryôiti ; 教授)

下越岩船郡・青森，ホロケ《ぼんやり者》庄内・会津，ホロケガサス《ぼける》島根・岡山；＜《古・ぼろになる・おちぶれる》〕

マガス（マカシタ／サナイ）〔他〕水などをこぼす，ひっくりかえす〔＜マク；青森・岡山，マケル庄内・仙台・新潟・三重など，ブチマケル《＝標》〕

マ「マナク（マ「マナィタ／カナィ）〔自〕どもる〔ママナキ仙台『浜荻』・群馬など，マダキ福島，ママヤク長野・《あわてる》岐阜益田郡・神奈川津久井郡など〕

ムジ^ル（ムジ^ッタ／ラナイ）〔自〕まがる「首がムジラ／なった；左にムジレバそんまそこだ《すぐそこだ》」

モ「モイタ^ッ（～タ^ッタ／タナイ）〔句〕つかれて，ももが板のように固くなり痛む〔モモタ《もも・また》加賀『加賀なまり』・東北・長野・岐阜・長崎など；ほかにモモタン阿蘇，モモタブラ富山・奄美など〕

☆モヨカス（モヨカシタ／サナイ）〔他〕たまごを孵化させる

☆モヨケル（ケナイ）〔自〕たまごが かえってひよこが出てくる，カエルなど小さい生きものが生まれる〔ミヨケル山形・新潟，ムヨケル山形・岩手九戸郡〕「ゲ^ック《カエル》の子^レがふ^ッと^ッ《たくさん》モヨ^ッケタ」

☆モンボレガ^ェル（～ガ^ェッタ／ラ・ンナイ）〔自〕あつくて頭がぼうっとする，のぼせる

ヤケ^ル（ケナイ）〔自〕いらだつ〔岐阜恵那郡〕

ヤジガム・ヤジケ^ル・ヤジレ^ル（ヤ「ジカンダ／マナイ）〔自〕あつさで葉がやけてしなびる

ヤ「シャクシャス^ル〔句〕気をもむ，やきもきする〔ヤジヤジ《いらいら》山口県大島〕

ヤ^ッキヤキス^ル〔句〕＝ヤシャクシャス^ル〔群馬・静岡・和歌山〕「ざ^ッきからヤ^ッキヤキ^ッテ^ッ待^ッて^ッなる《お待ちかね》」

☆ヤ^ム（ヤ^ッダ／マナイ）〔自〕(1)内部から痛む〔《古》古今著聞集16-547「しばしば^{このきず}此疵のあとやむ由して」〕「ヨ^ビ《指》のさきがヤンデ，字「も書かん^ナィわ」(2)子どもがおこって，きめこむ。≡ヤケ^ル〔《古・心でなやむ》源氏物語・濤標「……と心や^ミみおぼしけれど」〕

ヨ「セル（セナイ）〔他〕（仲間に）入れる。＝カtas，立ちよらせる〔《入れる》大垣・京都・出雲など〕「おれもヨ「セテもらわ^ナィろ《～ないでしょう》ねす」

ヨッ^バラニナル〔句〕もうこれ以上は要らなくなる，じゅうぶんだ〔栃木『常陸方言補遺』〕「～ほどスキ^ッーをし^ッた」

ヨ「バル（ヨ「バッタ／ラナイ）〔他〕よぶ；名をよぶ〔《古》赤染衛門集「昔の人…よ^バば

ノナル（～ナッタ／ラ・ンナイ）【自】なくなる

☆ハシタクル（～タクッタ／ラナイ）【他】すそなどをはしよる

ハタク（ハティタ／カナイ）【他】たたく，打つ〔《＝標》・盛岡『御国通辞』・仙台『浜荻』〕「安兵衛太鼓ハティテンノだれだ？」（赤穂義士・中山（堀部）安兵衛は本市の出。義士堂や手植の松がある。）

ハバケル（ケナイ）【自】ものがのどにつかえ，吐きそうになる〔南部・秋田・山形県村山地方・下越・《ふさぐ》宮城・《乱雑にする》岐阜益田郡〕

ハヤス（ハヤシタ／サナイ）【他】大根などをうすく切る〔東北・中国・対馬など《切る》京都府与謝郡・鳥取《もちを切る》淡路島・高知・仙台，など〕

☆ヒッチャバク・フツツバク（～チャバ^バィタ／カナイ）【他】ひきさく，やぶりすてる〔＜サバク〕

☆フッタツ（～タッタ／タナイ）【自】持ちあがる，立ちあがる，つかれて上がらなかった手足・体が上がるようになる「あ^ィや，や^ッとかフッタツ^ッてば《～よ》」

フタデル（テナイ）【他】持ちあげる〔西蒲原郡など，フツチャゲル千葉縣市原郡〕

ブウ（ブッタ／ワナイ）【他】背負う，おぶう「くたびれたんだばブテくれよ《おんぶしてあげよう》か。おや，おかさまにバ^レテ（ブ^レテ）い^ィこと」〔ブンブ仙台『浜荻』〕（2.3.参照）

ヘタツク（～ツィタ／カナイ）【自】へたばる〔ヘタル《古》・西日本〕

ブチャル・ピチャル・ベチャル（ベチャッタ／ラナイ）【他】すてる，うちやる〔ブチャ（ー）ル群馬・山梨・新潟・長野；〔bu>bi>bi>beと変化したか〕

ホゲル（ゲナイ）【他】炭火をほりひろげる，ほりおこす〔米沢・越後・長野上水内郡・《ちらかす》伊豆・八丈島・《穴があく》日葡辞書 foguru（九州）ほか〕

☆ホゲカマワナイ／ホゲカモォナ（打消だけ）【他】めんどろを見ない〔そ^ッつけだ野郎っ子なん《なんか》ホゲカマワナイ^ィこって《＜コト・エ；いいじゃないこと？》〕

☆ホゲコロブ（～コロダ／打消形ない）【自】ひどいころび方をする

☆ボッコワス（～コワシタ／サナイ）【他】ぶちこわす。ブッコワスとも

☆ボッコ（ワ）レル（レナイ）【自】こわれる「〇〇^{ちよオ}町のボッコレ台輪……」（祭ではかの町内の衆をはやしたてる文句から）

ボッタグル・オッタグル（～タグッタ／ラナイ）【他】追いかける〔上越中蒲原郡・広島御調郡，《追いはらう》上越岩船郡・秋田，ボウ青森・盛岡・岐阜・広島など〕

ホロケル（ケナイ）【自】だらしなく酒に酔う〔《ぼんやりする・年をとってぼける》〕

中膝栗毛「いろいろにだましつすかしつ……」・ダマカス岐阜県郡上郡「かしこ^レィヤ^レ《あかんぼう》だすけ、いっこにダマサレ^レばさ《あやせるものか》」

タラス（タラシタ／サナイ）・タラカス〔他〕だます「タラカソ^レってったって容易にタラカサレ^レば！《だまされようか；反語》」〔《＝標・蕩す，あまいことばで言いくるめる》史記抄11「鮑叔ヲダシヌイテタ^レライタ^レゾ」・《なだめすかす》岐阜・愛知・若狭・志摩・京都など〕

チ^レョ^レス（チ^レョ^レシタ／サナイ）〔他〕いじる，もてあそぶ「あ^レちさん《よその方》のものだればチ^レョ^レサナ^レィバ イ^レィサ《さわらないほうが いいよ》〔盛岡『御園通辞』・青森・福島県相馬郡・茨城など＜《古》寵す？〕チ^レョ^レシコモ^レッ^レコ ス^レル〔句〕もてあそぶ，いじりまわす〔チ^レョ^レーシモッ^レコ宮城県登米郡〕

☆チ^レョ^レチ^レョ^レクチ^レョ^レテ ユ^レウ〔句〕たいへんな早口で話す「ひ^レんど《ひどく》チ^レョ^レチ^レョ^レクチ^レョ^レテテ，さ^レっば わかん^レな^レィわ」

ツウロクスル〔自〕つりあいがとれる〔ツロク福井県遠敷郡・滋賀県栗太郡・奈良・愛媛・京都など，ツロッコー岡山，ツーロク愛知県知多郡〕

トタラポタラッテ アル^レク（アル^レィタ／カナ^レィ）〔句〕とぼとぼあるく。～パタラ「ばさ^レま^レだば《ならば》い^レましな《たったいま》～行^レった^レけが《行^レったようだが》」

ナガマル（ナガマ^レッタ／ラ・ン^レナイ）〔自〕ねそべる，よこたわる〔《＝標》広島双三郡・山阿武郡〕

ナゲル（ゲ^レナイ）〔他〕すてる「が^レす《ごみ》ナゲ^レテ来^レや」〔盛岡『御国通辞』・仙台『方言考』〕

ナス（ナシタ／サナイ）〔他〕かえす，返済する「や^レつとこす^レつどこナシタ^レども，せつないわ《つらい》」〔《＝古》西大寺本金光明最勝王經平安初期点本「而モ堪ヘテ済弁（ナシハタ）サムヤ」・ナヤス但馬〕

ナデツク（～ツ^レィタ／カナ^レィ）〔自〕なだれがおこる〔ナゼ《雪崩》新潟・長野上高井郡〕

ナンギスル〔自〕苦勞する，困難にあう「ほ^レんに～シテざ^レァ」〔《＝標》新発田でよくつかう〕ナンギ〔名・ナ形〕《つらい》「か^レらだが～ダ」

☆ニヤニヤスル〔自〕腹の具合がわるい

ネマル（ネマ^レッタ／ラ・ン^レナイ）〔自〕すわりこむ〔奥の細道「涼しさを我宿にしてねまる也」日向・北陸『物類称呼』・盛岡・仙台・加賀・岐阜吉城郡・島根簸川郡など〕

ノ^レォ^レナス（～ナシタ／サナイ）〔他〕なくす。＝ノ^レォ^レスル

- サバク (サバィタ / カナイ) 【他】裂く、やぶる「やりむり引っぱ^(る)とサバケル【自】
ど」[《=標・捌^{さば}く・処理・裁断》・秋田・庄内・長野・静岡・三宅島・八丈島]
- サベル (サベッタ / ラ・ンナイ) 【自・他】(1)しゃべる(2)さとす、しかる [(2)新潟・
長野]・シャベル《しかる》愛知県海部郡 サベッチョ・シャベッチョコキ【名】
おしゃべりな人
- シビク (シビィタ / カナイ) 【他】すそなどを引きずる [ショッピク・ショビク歌舞伎
・紋尽五人男「親方までしょびいてゆく奴だが」・ソビク《引きずる》石見・山口
・大分・熊本宇土]
- シミル (ミナイ) 【自】こおる「よォベな《昨夜》わ いっこォシミテ、かなこォり《つ
らら》ができた」[仙台『浜荻』・庄内『浜荻』・石川『加賀なまり』など]
- ☆シム (終止形だけ) 【自・幼児語】死ぬ「ひゃくとり虫見てっと～ドォ」
- ☆シャッツケル (ケナイ) 【他】ひどい目にあわせる、やつける「じょォの気にな^てってっ
とシャッツケラレ^ッと《いためつけられるぞ》」
- ショオブスル 【他】制裁する [庄内・新潟]
- ジョケル (ケナイ) 【自】ふざける [新潟・群馬・山梨・長野・静岡、ジョーケル関東
『物類称呼』・新潟県古志郡・秩父、チョケル伊勢『俚言集覧』・近畿・淡路島は
か]
- ショォシガル (〜ガッタ / ラナイ) 【自】はずかしがる [(オ)ショォシ【ナ形】新発
田・粟島・千葉君津郡、ショーシイ東北・長野・三宅島など<笑止]
- ショム (マナイ / 完了形等ない) 【自】目や傷にしみる
- スズケタツ (〜タッタ / タナイ) 【自】初秋のすずしさを感じる
- ズル (ズッタ / ラナイ) 【自】ずれる、すべって移置がかわる [《=標》浄瑠璃・仏御
前扇車「一つでは片荷づる」]
- ☆ゾケル (ケナイ) 【自】雪が古くなり、とけかける [《古・品行がくずれる》浪花色八
卦「彼女のぞけたやうになる……」]
- ☆ソロソロニ イレル 【句】液体をなみなみとつぐ
- タガク (タガィタ / カナイ) 【他】持つ、持ちあげる、持っていく [庄内『浜荻』・秋
田・宮城・群馬県邑楽郡・長野下水内部など]「そんげ重(オーモ)ィもん、タガゴ
ォばさ《持つもんかい、いやだよ》」
- タクル (タクッタ / ラナイ) 【他】たくしあげる、まくりあげる [《=標》・仙台『浜
荻』・長野東筑摩郡・山梨など]
- ダマス (ダマシタ / サナイ) 【他】子どもをあやす、すかしなぐさめる [《古》東海道

☆ク「タイデ コマル」【句】気になる，気が重い

ク「ドク（ク「ド「イタ／カ「ナイ）【自】こごとをいう〔《標・ぐちをこぼす》・茨城新治郡・上越頸城地方〕

ク「レル（レ・ン「ナイ／命令形ク「レ・ク「レロ・オク「ンナサイ）【他】(1)人が自分（側）にくれる「お「ま^(メ)さま，これク「レや」(2)自分（側）が人にやる「お「ォ，あったらもん《おいしいもの》だどもク「レテヤル^ウ（力）」（ク「レテヤルのほうがク「レルよりも親身な心をこめた言い方）〔(1)《＝標》・(2)の用法はアイヌ語 kore，朝鮮語 juda，鹿児島方言のク「レル，英語 give などとおなじ〕

ク「ウル・ク「ウル（ク「ウィタ／ラ「ナイ）【自】ふさがる「あ「かみどこ《赤いきず口》がク「ウィタッタ《すでになおっていた》」〔東北〕目をク「ウィテ【句】目をつぶって

ケ「エル（エ「ナイ）【自】きえる

☆ゲ「ツバタスル【自】つかえながら話す

☆ケ「ッポル（ケ「ッポ「ッタ／ラ「ナイ）【他】ける

コ「ゲ（コ「イ「ダ／ガ「ナイ）【他】＜赤谷・菅谷地区^{スガタニ}＞やぶや雪をおしわけて進む→ コザク

コ「ゲル（ゲ「ナイ）【他】なべ底などを固いものでけずる，こそげる〔《欠ける》中国・愛媛大三島・福岡〕

ゴザ「イマス（～マ「シタ／マセン）【自】(1)「ある」の丁寧形，＝アリマスネス。(2)～デ「ゴザ「イマス「ダ」の丁寧形，＝デスネス。ゴザ「ッタ・ゴザ「ラシタ(1)《古》いらっしやった。ゴザ「ルはつかわず，イナザ「ル，オイデナザ「ルなど。(2)すこし頭が変だ「あのしょ《人》ちとばかりゴザ「ラシタげだ」

コザ「ク（コザ「イ「タ／カ「ナイ）【他】つもった雪・深くない川などを足をぬきさしして渡る，跋涉する〔岐阜郡上郡・吉城郡・山県郡〕

コサ「エル・コシャ「エル・コシャ「ウ（ワ「ナイ）〔kosjaɪruw, kosjeɾruw〕（エ「ナイ）【他】こしらえる

☆コス「クル（コ「ス「クッタ／ラ「ナイ）【他】こする〔コクル青森三戸郡・秋田鹿角郡・岐阜郡上郡・福井など。ククル山形庄内・富山射水郡〕

コチ「ョパス（コチ「ョバ「シタ／サ「ナイ）【他】くすぐる〔『俚言集覧増補』・新潟・山形〕

コチ「ョバ「ッタイ【形】

ゴ(ッ)セヤ「ケル・ゴ(ッ)シャ「ヤ「ケル（ケ「ナイ）【自】腹が立つ，しゃくにさわる「てんぽこき《うそつき》にコロ「ッとだまされて，ほんにバ「ァ，～てば」〔仙台『以呂波寄』・岩手・山形・福島・栃木・新潟県出雲崎・富山県礪波など〕

渡・オミヤース《同》佐賀・熊本]

オヤ^ㇿス (オヤシタ / サ^ㇿイ) 〔他〕 (雑草・ひげなどを) 生^はやす (↔ オエル) [《=標・話しことば》] 山形・福島県会津]

カガ^ㇿナク (カガ^ㇿニタ / カ^ㇿイ) 〔自〕 (1) 小さな声でおろおろ (泣きごとを) いう。

(2) すこしの病みや心配でくよくよする弱虫だ「こればっかしの傷でカガ^ㇿニテテワ
どしょも《どうしようも》な^ㇿねっか」[秋田・庄内・福島など] カ^ㇿガナキ 〔名〕

カズ^ㇿケル (ケ^ㇿイ) 〔他〕 人のせいにする「なん^ㇿもしな^ㇿィのにカズ^ㇿケラッテ (=ラレテ)
ごっしゃやけた《腹が立った》わ」[《=標》<カヅク, 好色一代女, 「暮れ方より
人に被^かける 臭 (かほ) なればとて」]

カ^ㇿタス (カ^ㇿタシタ / サ^ㇿイ) ・カ^ㇿタセル (セ^ㇿイ) 〔他〕 仲間に入れる (↔ カ^ㇿタナル)
「あ^ㇿわ《おさなすぎるので正式の仲間に入れない子》にしとくの, か^ㇿわ^ㇿィそ だす
け, カ^ㇿタシテやろで《～ぜ》」[対馬・鹿児島・福岡] → カ^ㇿテテクレル

☆カ^ㇿタナル (カ^ㇿタナッ^ㇿタ / ラ・ン^ㇿイ) 〔自〕 仲間^{はい}に入る。↔ カ^ㇿタス

ガ^ㇿ(ッ)ツ^ㇿタケル (ケ^ㇿイ) 〔句〕 喰^くい意地をはる [ガツガツする《標》<かつう・かつ
ゑる] ガ^ㇿツツ 〔名〕 くいしんぼう

ガ^ㇿッパレカ^ㇿク・カ^ㇿッピカ^ㇿク (川東地区) 〔句〕 川におちる [カ^ㇿッパリ《水におちこむ
こと》] 青森・秋田]

☆カ^ㇿテテク^ㇿレル 〔句〕 [<kataite <katasite] 仲間に加えてく^ㇿれる (または, あ^ㇿげる)
「お^ㇿれも げ^ㇿつつ《最後》でい^ㇿいすけカ^ㇿテテオク^ㇿッナサ^ㇿィや」

☆カ^ㇿモ^ㇿォ・カ^ㇿマ^ㇿウ (カ^ㇿマツタ / ワ^ㇿイ) 〔他〕 (1) 相手をする, 世話する, もてなす (2) か
らかう, すこしいじめる《=標》「わー^ㇿり《わるい》どもカ^ㇿマワ^ㇿナ^ㇿィデお^ㇿくん^ㇿなさ
ィ。お^ㇿじ《弟》ば^ㇿっかカ^ㇿモ^ㇿォテ, そ^ㇿっ^ㇿても あ^ㇿんにゃ《兄》か？」

☆カ^ㇿモ^ㇿス (カ^ㇿモシタ / サ^ㇿイ) 〔他〕 かきまわす

☆ガ^ㇿメル (ガ^ㇿメタ / メ^ㇿイ) 〔他〕 ぬすむ。ちょろまかす [東北・越後・栃木・群馬・
(東京俗語) など。《われがちに取りこむ》] 仙台『浜荻』・山口・ガ^ㇿメツ^ㇿィ《俗語・
ぬけめがない<ガ^ㇿメル+ガ^ㇿミツ^ㇿィか(国語大辞典)]

ガ^ㇿンベン^ㇿスル (～シタ / シ^ㇿイ) 〔他〕 ゆるす, 勘弁する [《=標》カンベン / 群馬;
新発田では「カ^ㇿンベンナ, カ^ㇿンベンセ^ㇿヤネ」をよくつかう。

キ^ㇿメル (メ^ㇿイ) 〔自〕 すねる「みんなして か^ㇿも^ㇿォ^ㇿだれば弟が^ㇿま^ㇿたキ^ㇿメ^ㇿテしも^ㇿたがね
ェ」キ^ㇿメ^ㇿッ^ㇿチョ 〔名〕 [仙台・福島・山形]

ク^ㇿツツマ^ㇿク (ク^ㇿツツマ^ㇿィタ / カ^ㇿイ) 〔他〕 (1) くいつく「犬^ニにク^ㇿツツマ^ㇿカ^ㇿレタ」(2) とじる
「目^ノク^ㇿツツマ^ㇿィテ…」[下越岩船郡]

アメル (メナ^イ) 〔自〕 食べものがくさる [盛岡『御国通辞』・三重など]

ア(ン)ベ^ㇿ 〔自・命令形〕 [→アィデヤル<アィブ《あゆぶ》・アィベ 常陸『常陸方言』
・伊豆大島・飛騨など] あるけ。止まっていないで、進め。`「雪をばこざいて《ふ
んで渡って》早よ^は〜や」

イゴク (イゴ^ㇿィタノカナ^イ) 〔自〕 動く [《古》狂言『昆布売』「いやいごかぬ」・
上越]「ちょ^ㇿちょら ちょちょら《ちょこまか》してなィで〜なや」

イロオ・イラウ (イロ^ㇿオタノイラワナ^イ) 〔他〕 いじる, いじりまわす「イロ^ㇿオテみっ
と, ざらもって《ざらざら》してる」 [＜いろふ; イロウ関西『物類称呼』・岐阜・
対馬など西日本。イラウ大阪『浪花聞書』・愛知額田郡・西日本]

ウダガル (ウダガ^ㇿッタノラ・ンナ^イ) もつれる [ウンダケル富山]

ウラシマル (〜シマ^ㇿッタノラ・ンナ^イ)・ウラツマル 〔句〕 便泌する [ウラ《1.こずえ
・木の末, 2.便》・ウラ, オウラ《大便》滋賀蒲生郡・《便所》敦賀・東北・静岡
など =〔古〕]

オェル (エナ^イ) 〔自〕 (草などが) 生える「やや^ㇿて《赤ちゃん》の歯^はァオ^ㇿエテ来たよ」
[東北・仙台『浜荻』・庄内『浜狄』・九州など]

オサェル (エナ^イ) 〔他〕 魚や虫, 鳥をつかまえる [《=標》平家物語「水の底で倉光
をとつてをさへ」・ことわざ「おさえたバツタ」]

オ^ㇿタチスル (シタノシナ^イ) 〔自〕 もてなされて満腹になる。「いや^ㇿや, も^ㇿは《もは
や》〜シテ, 失礼いたしますがね《〜よ》」 [オ^ㇿタチ《酒食を強くすすめること。
客の帰りぎわにすすめる酒食》東北・長野県下伊那郡<お^ㇿ発ち]

オチル (チナ^イ) 〔自〕 降りる「ふ^ㇿとつ《たくさん》雪^お降ろししたすけ, オチ^ㇿバ
いィさ」 [東北・千葉県香取郡]

☆オッカクッセル 〔句〕 おどし文句をいう [鹿児島^ㇿのオッカ《負債》・岩手気仙郡オッ
カベル《おそれる》等と関係があるか?クッセル<クワセル]

オ^ㇿッキョナル (〜ナ^ㇿッタノラ・ンナ^イ) 〔句〕 大きくなる。オ^ㇿッキョナル↔チ^ㇿ(ッ)ソナ
ル。「形容詞接続形2a (連用形)+ナル (またはスル)」形式の動詞句は, とりわ
け役立つので, 代表としてこの見出し語をかかげる。ア^ㇿツナル=ア^ㇿッチョナル
《暑くなる》, ア^ㇿマゴスル《あまくする》など。

☆オ^ㇿッタスル 〔自・子どもことば〕 おんりする (降りる)「あぶなィすけ《から》〜シ
ナサイやね」 [オ^ㇿチタからか]

オ^ㇿマィスタ^ㇿレル 〔句〕 ごまをする。お追^{まい}従をいう [＜売僧《墮落した僧・商売で人を
だます僧や人》『日葡辞書』 Maisuuo yū・《あざむく》, オ^ㇿマィス《おべっか》佐

(ヘ) 例文は「 」に入れて示す。できるだけ新発田語らしい名詞・副詞・文末表現を採用するようにする。

(ト) 『全国方言辞典』『分類方言辞典』にない見出し語に☆印をつける。

* * *

アイデヤ^ㄱル (～ヤッタ / ラナイ・ンナイ) 【句】いっしょに行ってやる。「おれ^ㄱ《私》もヤッから、おっかのな^ㄱろ《こわくないだろう》？」[ア()^ㄱべくアイブ^ㄱ《あゆぶ》]ただし新発田では接続形 2b と命令形ア()^ㄱべが多く、終止形は聞かれないようである。アイブ仙台『浜荻』・静岡・岐阜山県郡・飛騨・和歌山など・柳多留 11「江戸へあいばんかと つばな うりにいひ」・ヤープ上越^{くびき}県頸城郡・関東一円ほか]

アオル (アオッタ / ラナイ) 【他】諏訪神社の祭りでダイワ(台輪=山車)をはげしく揺り動かす(あおり立てて、ほかの町内の台輪を威嚇する)日葡辞書[《古》馬の障泥^{あおり}を強くけって急がせる。Auori, u, otta (アヲリ・アヲ^{しも}ツタ)《下(俗語)では……あおぐように両手を動かすことにいう。》]

アガル (アガッタ / ンナイ・ラナイ) 【自】《目標》小学校に入る「も^ㄱォは^ㄱィ《もう》学校に～歳^{とし}だ^ㄱげだ《のようだ》」[岐阜・大阪南河内などで《学校から帰る》・大阪《学校を卒業する》]

アタケ^ㄱル (ケナイ) 【自】あばれる[《古》歌舞伎兵根元曾我「あれあの如く鼠があたけます」・アダケル, アジャケル陸奥『物類称呼』・千葉・北陸など, アダケオンナ《おてんば》新潟県粟島]

☆**アツチャブル** (～ブッタ / ラナイ) 【他】ばかにする, あなどる「～ブッテタレバ負けてしもた」

アツラ^ㄱェル (エナイ) 【他】《=標》人にたのんで持って行ってもらう, たのんで作ってもらう。[上越]

☆**アバ^ㄱェル** (エナイ) 【自】あまえる[アバサケル《はしゃぐ・あまえる》群馬・千葉・福井。アバケル《あばれる・ふざける》新潟・東北・関東など]

アバ^ㄱェカバ^ㄱィナン^ㄱナイ 【句】かばいきれない「あってわ《あれでは》だっても《だれも》～ね^ㄱェ()」[《古》アバフ《かばう》撰集抄6「(虎を)錫杖にてあばへりけれど」]

アビ^ㄱル (ビナイ) 【自】《=標》水あび(水浴・水あそび)する。川・海辺でおよいだり遊んだりする。「前^{まえ}は, よ^ㄱォ《よく》加治川^{かじがわ}で水アビしたも^ㄱんだわ《ものだよ》」

アマサ^ㄱレル (レ・ンナイ) 【自】あまえてふざける。じゃれる。[→アバ^ㄱェル; アマゴ^ㄱェル静岡・山口など]

下1段メ^ㇿェルの意味は、東京語とおなじく、「目で見ることができる」と尊敬語「来られる／ある場所に行かれる」の両方につかう。岐阜・愛知のミ^ㇿェルのように「ある場所に居られる」（尊敬）の意味で用いることはない。その場合は、イナ(サ^ㇿル・イラ^ㇿル・オ^ㇿィデニナル などという。メ^ㇿェルに命令形はないので、かりにカッコ入りにしたが、たとえば、蹴^ㇿレ・出^ㇿレ・寝^ㇿレ・ガメ^ㇿレ《ぬすめ》のように、5段活用の命令形の母音 / -e / をふくむ。

5段 ネ^ㇿマレ《すわりこめ》 nemare

サ変 ショ^ㇿオブ・セ^ㇿエ《しかりつけろ》 sê

カ変 ケ^ㇿエ《来い》 koi > kê

上1 オチ^ㇿレ《降りろ・落ちろ》 ocire

下1 コ^ㇿシャエル《こしらえろ》 kosyaire

* ク^ㇿレル《くれる／あげる》の命令形は標準語とおなじく、例外の語形クレ^ㇿおよびクレ^ㇿになる。ていねいな命令もナ^ㇿサイ [nasai, nasε] で、ナサレではない。

§ 3. 新発田方言の動詞と動詞句

前節(2.5.)で見たように、標準語と共通の動詞であっても、すべて命令形は新発田(実は東北)式に変化させる。また、§ 4に示す言いまわしの中に組みこむことによって、標準語とおなじことばも、すべて新発田方言の語彙に所属することになる。しかし、ここでは、「かがっぽて」の形容詞類の場合とおなじく、標準語と共通の動詞を何百ととりあげず、新発田弁らしさをきわだたせるようなことばにかぎって紹介する。

- (イ) 見出し語のうち、感情的な内容をもつ動詞については、形容詞の場合とおなじく、強調して、長く、あるいは強めに発音される音節に下線をほどこす。

たとえば、けんかのときに「人をばア^ㇿーツチャブッテ《バカにして・あなどって》……」と言ひ、あるいは「いっば^ㇿィことヨバーレテ《ごちそうをしてもらって》腹くっチャィ《いっばい》」とわらう。

- (ロ) 陳述形1a(終止形)を見出し語とし、そのあとに()入りで完了の形1bと打消の形の後半部分を示す。例：チョ^ㇿォス(チョ^ㇿォシタ/サナ^ㇿィ)—— 打消がチョ^ㇿォサナ^ㇿィになることを示す。1段動詞の完了形ははぶく。

- (ハ) 《 》の中におおよその意味を示す。標準語とほぼおなじ場合は《=標》とする。

- (ニ) 【自】自動詞，【他】他動詞，【句】動詞句などの略語で文法上の分類を示す。

- (ホ) ほかの方言における分布や古典の中での用例は〔 〕の中に示す。

* 接続形 *za* (連用形) が3音節以上のア^ㄱガリ・サ^ㄱガリ・マ^ㄱガリ・ト^ㄱマリなど、準3音節のオ^ㄱリ・ト^ㄱリ・カ^ㄱリなどが はねる音に変わりやすい。2音節の切^ㄱリ・取^ㄱリ・寄^ㄱリなどは、命令形の場合に「ン」になることが多いようである。例：寄^ㄱンナサイ^ㄱテ 《寄っていったらいいでしょう》

** [レ+ナサル・ナサイ] は、(オ)ク^ㄱンナサイ・(オ)ク^ㄱンナサルが例外なのかもしれない。

全体に、日常よく用いられる動詞にこの現象が見られるようである。

(vii) /ラ → ン/ 一部の動詞のうちけし形で

ワカ^(ㄱ)ンナ^ㄱイ 《理解できない》*

タ^(ㄱ)ンナ^ㄱイ 《足りない・足らない》

マワ^(ㄱ)ン^ㄱノ^ㄱォ ナ^ㄱッタ 《回らなくなった》

ツマン^(ㄱ)ナ^ㄱイワ^ㄱネ 《まったくおもしろくない》〔口語〕つまんない)

* 知^ㄱンナ^ㄱイ・取^ㄱンナ^ㄱイ等はない。

2.5. アビルとメェルの変化および命令の言い方

国文法の上1段および下1段活用に属する動詞の例として、ア^ㄱビル《水浴する》とメ^ㄱェル《見える》をとりあげる。この2種類は、「末」の母音に /i /と /e / のちがいがあるだけで、おなじ性質の語形変化である。

1 a	ア ^ㄱ ビル	メ ^ㄱ ェル	メ ^ㄱ ェナ ^ㄱ イ
b	ア ^ㄱ ビタ	メ ^ㄱ ェタ	メ ^ㄱ ェナ ^ㄱ イカ ^ㄱ ッタ
c	ア ^ㄱ ビタ ^ㄱ ッタ	メ ^ㄱ ェタ ^ㄱ ッタ	メ ^ㄱ ェテ ^ㄱ ナ ^ㄱ イカ ^ㄱ ッタ
d	ア ^ㄱ ビ ^ㄱ レ	(メ ^ㄱ ェ ^ㄱ レ)	(メ ^ㄱ ェ ^ㄱ ンナ)
e	ア ^ㄱ ビ ^ㄱ ヨ ^ㄱ ォ	メ ^ㄱ ェ ^ㄱ ヨ ^ㄱ ォ	メ ^ㄱ ェ ^ㄱ マ ^ㄱ イ
2 a	ア ^ㄱ ビ	メ ^ㄱ ェ	メ ^ㄱ ェズ
b	ア ^ㄱ ビ ^ㄱ テ	メ ^ㄱ ェ ^ㄱ テ	メ ^ㄱ ェ ^ㄱ ナ ^ㄱ イ ^ㄱ デ・メ ^ㄱ ェ ^ㄱ ノ ^ㄱ ォ ^ㄱ テ
c	ア ^ㄱ ビ ^ㄱ タ ^ㄱ リ	メ ^ㄱ ェ ^ㄱ タ ^ㄱ リ	メ ^ㄱ ェ ^ㄱ ナ ^ㄱ イ ^ㄱ カ ^ㄱ ッタ ^ㄱ リ
3 a	ア ^ㄱ ビ ^ㄱ ット	メ ^ㄱ ェ ^ㄱ ット	メ ^ㄱ ェ ^ㄱ ナ ^ㄱ イ ^ㄱ ト
b	ア ^ㄱ ビ ^ㄱ レ ^ㄱ バ	メ ^ㄱ ェ ^ㄱ レ ^ㄱ バ	メ ^ㄱ ェ ^ㄱ ナ ^ㄱ イ ^ㄱ バ
c	ア ^ㄱ ビ ^ㄱ タ ^ㄱ ラ(バ)	メ ^ㄱ ェ ^ㄱ タ ^ㄱ ラ(バ)	メ ^ㄱ ェ ^ㄱ ナ ^ㄱ イ ^ㄱ カ ^ㄱ ッタ ^ㄱ ラ(バ)
d	ア ^ㄱ ビ ^ㄱ タ ^ㄱ レ ^ㄱ バ	メ ^ㄱ ェ ^ㄱ タ ^ㄱ レ ^ㄱ バ	メ ^ㄱ ェ ^ㄱ ナ ^ㄱ イ ^ㄱ カ ^ㄱ ッタ ^ㄱ レ ^ㄱ バ

ア^ㄱビルの打消は省略した。打消命令形は ア^ㄱビ^ㄱンナ^ㄱ となる。

d シタ^ㇿレバ シナ^ㇿィカッタレバ 《しなければ ならないよ》

スット、スンナおよび原形としてスルを太字で目立たせたのは、ラ行音のルが、つまる音 /q /⁽⁶⁾ または、はねる音 /ñ /⁽⁷⁾ に変わる現象を強調するためである。

(i) /ル→ッ / 破裂音 /k・g・t・(d)/ のまえて

スッカ^ㇿネ 《するかね?》

スッカ^ㇿネ 《するがね。するよ》

スッテ^ㇿサ 《するってさ》

スッドォ・スットォ・スルド 《するぞ》

(ii) /ル・ト→ッ / 摩擦音 /s / のまえて

スッ^ㇿサ 《するさ》

スッ^ㇿシ… 《するし》

スッ^ㇿスケニ 《するので》

スッコッ^(ト)サ 《もちろん する^{はず}コトだよ》

(iii) /ル→ン / 鼻音 /m・n / のまえて

スン^ㇿモンダ 《するものだ、当然》

スンマ^ㇿェニ 《するまえに》

スンナ^ㇿッテバ 《するなって言ってるだろ》

スンノ^ㇿカネ 《するのかね》

(iv) /レ→ン / 受身・可能の(ラ)レ+ナイ

タベラン^(レ)ナイ^ㇿ 《食べられない》

コラン^(レ)ナイ^ㇿ 《来られない》

カタセテ モラワン^(レ)ナイ^ㇿ 《参加させて もらえない》〔可能〕

ハタカン^(レ)ナイ^ㇿ 《たたかれない》〔受・可〕

(v) /リ・レ→ン / 丁寧のナ(サ)ル・ナサイのまえて

アガ^(リ)ンナ(サ)ㇿル 《上がりなさる》*

アガ^(リ)ンナザ^ㇿィ 《上がってください》

オク^(レ)ンナザ^ㇿィヤ 《下さいませ》**

(6) 「ッ」を独立の mora 音素 /Q / としてあつかわず、まえの音とともに 1 音節を構成する音素として /q / であらわしてみる。

(7) 「ン」 /N / にあたる。

下1	ナゲル《すてる》	ナゲラ ^レ ル	ナゲラン ^ニ ィ
上1	シビル《ひきずる》	シビラ ^レ ル	シビラン ^ニ ィ
カ変	グル《来る》	コ　ラ ^レ ル	コラン ^ニ ィ

打消の形で撥音便がおこるためなのか、コラン^ニィ、ナゲラン^ニィがコ^シナィ（コレ^シナィ）、ナゲ^シナィ（ナゲレ^シナィ）にならず、肯定のほうも「あす来^ラレ^ッかね？」「本がナゲラ^ッテタ《すてられていた》よ」と言う。

ブワレル、ブワ^ニィの発音は、しばしばw音をはさむねじれ音にかわり、ブ^ワワレル[bwarerw]、ブ^ワナィ[bwane]となる。グウ《食べる》もク^ワ（ア）ナィ[kwa:ne]になる。ブ^ワレル《おぶわれる》は、さらにブ^ワル・バール《おぶさる》という自動詞も生みだしているようである。《目をつぶって》ということ「目^ヲク^ワィテ」といい、「目がク^ワル《とじられる》」「きずがク^ワル《なおる》」という動詞があるが、これらもク^ワィテ、ク^ワルと発音される。この現象は、音/kwa/・/gwa/を保存し、カ^ジ《家》とク^ジ《火事》の区別をする越後方言の特色と連動するものと言えよう。

2.4. スル・スット・スッナの変化

サ行変格活用のスルは、新発田方言でも、標準語とほぼおなじであるが、仮定形（条件形3a）が「セ（バ）」になる。つまり古典語（文語）文法の「未然形+バ」という本来の形式がのこったものである。

「セ^バ」はまた、《さらば・それでは》の意味でわかれぎわの間投詞としても頻繁に用いられる。「（ソォ）セ^バ、また。」「セ^バ、あす。」

みとめ		うちけし	用　　例	
1 a	ス ^ル	シ ^ニ ィ	(1 a)	スル ^ネ ス 《します》
b	シ ^タ	シ ^ニ ィカッタ		スッカ ^ネ 《するかい？》
c	シ ^タ ッ	シテ ^ニ ィカッタ		スッサ 《するさ》
d	セ ^エ	ス ^ン ナ		スッ ^ノ ガ　イ ^ィ
e	シヨ ^ォ	スマ ^ィ		《するのが　いい》
2 a	シ ^ヅ	セ ^ズ	(2 a)	シナ（サ）ル 《なさる》
b	シ ^テ	シ ^ニ ィデ・シノォテ	(2 b)	シテ　クレル 《して　あげる。
c	シ ^タ リ	シ ^ニ ィカッタリ		して　くれる》
3 a	ス ^{ット}	シ ^ニ ィト	(3 b)	勉強セ ^バ イ ^ィ ドモ
b	セ ^バ ・ス ^レ バ	シ ^ニ ィバ		《～すれば　いいのだが》
c	シ ^タ ラ（バ）	シ ^ニ ィカッタラ（バ）		シ ^ニ ィバ　ダ ^ヨ

ろう》, ハロオ《はらう》などは, ワラウ, ヒロウ, ハラウと発音すること多いから, こちらを見出し語にかかげ, 重母音 / - au , - ou / が / - ô / (中越では / - au > - ô /) となった語形をあとにならべるのも一法であろうか。

いわゆる5段活用に属するブウとワロオの変化を簡単に示せば, つぎのようになる。

ブウ		ワロオ		
1 a	ブ ^ㇿ ウ	ブワナ ^ㇿ ィ	ワ ^ㇿ ロオ・ワラウ	ワ ^ㇿ ラワナ ^ㇿ ィ
b	ブ ^ㇿ ウタ	ブワナ ^ㇿ ィカッタ	ワ ^ㇿ ロ ^ㇿ オタ	ワ ^ㇿ ラワナ ^ㇿ ィカッタ
c	ブ ^ㇿ ウタッタ	ブ ^ㇿ ウテ ^ㇿ ナ ^ㇿ ィカッタ	ワ ^ㇿ ロ ^ㇿ オタッタ	ワ ^ㇿ ロ ^ㇿ オテ ^ㇿ ナ ^ㇿ ィカッタ
d	ブ ^ㇿ エ	ブ ^ㇿ ウナ	ワ ^ㇿ ラエ ^ㇿ	ワ ^ㇿ ラ ^ㇿ オナ ^ㇿ
e	ブ ^ㇿ オ ^ㇿ オ	ブ ^ㇿ ウ ^ㇿ マ ^ㇿ ィ	ワ ^ㇿ ラ ^ㇿ オ ^ㇿ オ	ワ ^ㇿ ラ ^ㇿ オ ^ㇿ マ ^ㇿ ィ
2 a	ブ ^ㇿ ィ	ブ ^ㇿ ワズ	ワ ^ㇿ ラ ^ㇿ ィ	ワ ^ㇿ ラ ^ㇿ ワズ
b	ブ ^ㇿ ウテ	ブワナ ^ㇿ ィデ ブワ ^ㇿ ノ ^ㇿ オテ	ワ ^ㇿ ロ ^ㇿ オテ	ワ ^ㇿ ラワナ ^ㇿ ィデ ワ ^ㇿ ラワ ^ㇿ ノ ^ㇿ オテ
c	ブ ^ㇿ ウタリ	ブワナ ^ㇿ ィカッタリ	ワ ^ㇿ ロ ^ㇿ オ ^ㇿ タ ^ㇿ リ	ワ ^ㇿ ラワナ ^ㇿ ィカッタリ
3 a	ブ ^ㇿ ウト	ブワナ ^ㇿ ィト	ワ ^ㇿ ロ ^ㇿ オ ^ㇿ ト	ワ ^ㇿ ラワナ ^ㇿ ィト
b	ブ ^ㇿ エ ^ㇿ バ	ブワナ ^ㇿ ィバ	ワ ^ㇿ ラ ^ㇿ エ ^ㇿ バ	ワ ^ㇿ ラワナ ^ㇿ ィバ
c	ブ ^ㇿ ウタラ(バ)	ブワナ ^ㇿ ィカッタラ	ワ ^ㇿ ロ ^ㇿ オ ^ㇿ タ ^ㇿ ラ	ワ ^ㇿ ラワナ ^ㇿ ィカッタラ
d	ブ ^ㇿ ウタレバ	ブワナ ^ㇿ ィカッタレバ	ワ ^ㇿ ロ ^ㇿ オ ^ㇿ タ ^ㇿ レバ	ワ ^ㇿ ラワナ ^ㇿ ィカッタレバ

実際には, 陳述形 1 a (いわば原形) ばかりでなく, 1 d・命令形と 2 a・接続形とは, おなじ音声になる場合もすくなくない。1 d, 2 a とも, ブイ [buɪ, buɛ], ワライ [warai, warɛ] ぐらいの音価をもつこともある。条件形 3 a も ブイバ, ワライバになるが, ゆっくりと強調する際には, エが聞かれる。なお, このブイ・ブイバは, 形容詞 サム ^ヰ [samuɣ, samɣ (サミュ)] とちがい, ビュ [bɣ] (ローマ字で bü) のような音価にはならない。

*

*

*

他動詞のブウの受身と可能は **ブワレ^ヰル**, ワロオ・ワラウは **ワラワレ^ヰル** となる。これは標準的な言い方に近く, コレ^ヰルとかタベ^ヰルなどの今様の形は, 方言自体には存在しない。

	みとめの形	うちけしの形
5 段 クウ《喰う》	クワ ^ヰ レ ^ヰ ル	クワン ^ヰ ナ ^ヰ
サ変 スル《する》	サ ^ヰ レ ^ヰ ル	サン ^ヰ ナ ^ヰ

がある。それらは、上にあげた語形 (word form) に、付属語やおぎないの単語がそえられたものと見なす。

(4) 推量の言い方 [1a ~ c + rô 《だろう》]

クッロォ [kurrō(:)], クルロォ

キタロォ 《来ただろう》

キタッタロォ 《来ていただろう》

コナィロォ 《来ないだろう》

コナィカッタロォ 《来なかつただろう》

東部、福島寄りの赤谷では、rô のかわりに、東北方言の bê を用いる。

クルベェ

シネェベェ

ベェは、古代のベシを受けつぐ助動詞で、平安朝以来ベイ・ベウの音便が見られる。

命こそかなひがたかシベいもなのめれ〔『源氏物語』濤標; 1000 年ごろ〕

物ヲカエシツヘイ者ニナラデハ不惜〔桃源瑞泉『史記抄』18; 1477 年〕

ロォのほうは中部方言型の助動詞で、ラムから来たもの。長野県伊那谷や静岡のラァ [ra:] (行クラァ・行ッツラァ) や信州北部、越後中部などのローァ [rɔ:] (16 世紀キリシタン・ローマ字で rō) と同じだが、下越・新発田地方では、口をせばめたロォ [ro:] (キリシタン・ローマ字 rō) となった。室町時代の用例を見よう。

シカスルラウト ユタンナク ヨモウ〔『論語抄』1; 1475 年ごろ〕

machigaide coso arurō to yūte (まちがいでこそ あるらうと ゆうて)〔不干ファビアン『天草本平家物語』p. 262; 1592〕

2.3. ブウ、ワロォの変化および受身

音声だけから見ると、動詞ブウ《おぶう・人をせおう》もブゥとすべきであり、ワロォ《笑う》も、小文字を用いてワロォである。しかし、文法の立場では、語末のウおよびォは、動詞の「末」として、コザクのクやダマス《子をあやす》のスとならぶ、重要な活用語尾であるので、あえて大文字にした。なお、ワロォ、ヒロォ《ひ

その反面、市本庁管轄地区は4万7546人、60.8%にのぼる。いわゆる市街地の旧新発田町^{まち}(¹⁰)中心部から西北端・住吉町^{すみよしちょう}（旧猿橋・舟入^{さるはし ふないり}など）までの人口は3万1712人、総人口の40.6%である。この地域内外の都市化が目立つ。

国鉄新発田駅および西新発田駅の定期乗車券発行数は1976年度で約20万件。ただし、1980年には17万6000件。反対に、この4年間に乗用車の数が9054台から1万4376台にふえ、市の内外^{うちもと}の道路が整備された。

図2のとおり、農業・林業・水産業の人口も1976年4917世帯から1981年4709世帯にへった。第2次産業すなわち工業・製造業と第3次の商業・サービス・事務系の人口が今後も大きくなっていくであろう。

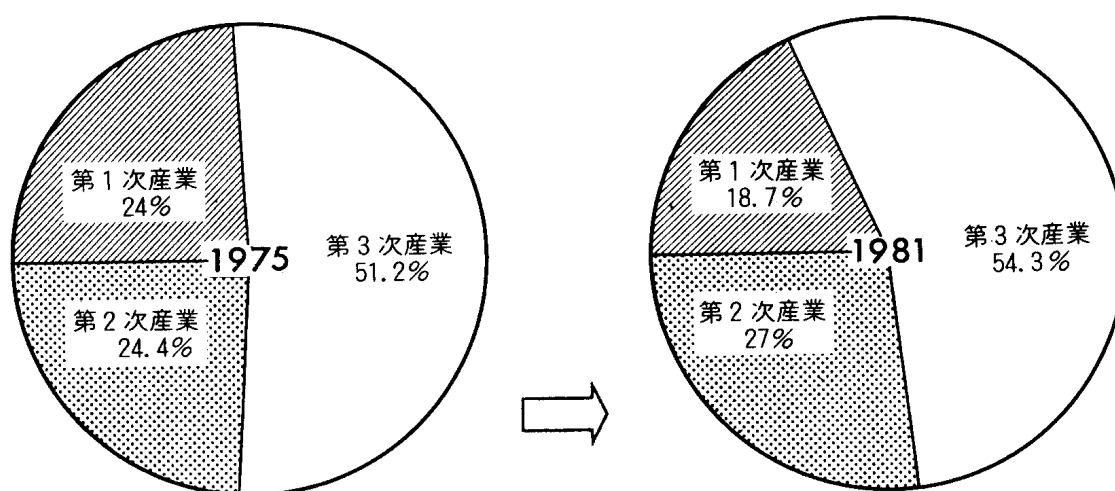


図2 新発田市産業別人口の動き

なにも農業・林業・水産業にたずさわる人だけが古くからの方言を言いつたえてくれると言うわけでないが、外との取引、つきあいの多い事務職・商業・自由業等の人口の増加は、言語生活の標準語寄りにつながる要因となるであろう。

また、1925（大正14）年に新発田町の人口は2万0036人、3737^{しよたい}所帯⁽¹¹⁾、1家庭あたり5.36人だったのが、今日では3.7人（1981年）、3.6人（1985年）と、いわゆる核家族化もすすんでいるようすである。中高年層とわかい世代とが別々に生活の場をいとなんでいる。文の抑揚、単語のアクセント、および一部の方言文型は根づよくのこりはするかもしれないが、方言本来の音韻体系^{システム}と語彙は急速にうしなわれているようである。

(10) 新潟県では自治体たる町村は「中条町・聖籠町・加治川村」と訓よみ。
ちようそん なかじようまち せいろうまち かじがわむら

(11) 『新発田市史・下』（小林式監修・市史編纂委 1981刊）

～2音節を、高く長く発音し、後半は^ンジョサマ ^ミタイダ《庵主(尼)様みたいな》口調でモゴモゴという話し方は、この世代の^{ショ}ガタ《方々》をうしろだてに、たもたれるのではないだろうか。

- (ア) ^ホンニ今年ノ夏ワ，フエン^{フエン}《Föhn, 勢風》現象ダヤラ，^アー^ッチェ^カツタテバ
《暑かったもんだね》。
- (イ) ^イマ^シガタ，ウチニ《うちで》煮タバ^ッカデッスケニ《ですさかいに》ウ^モ
《おいしく，うまく》アリマ^スガネス。
- (ウ) ^イヤ^ーヤ，^シー^ィ⁽⁹⁾ ^エー^エ?! 《ほんとうに，そこにいるのは シーちゃんなの
?》

ことしも8月27・28・29日の盛大なオス^ッサマ《諏訪神社》のお祭りの，ケンカ^{ダイ}台
輪^ワ《山車どうして先をあらそう巡幸》を見る雑踏の中で，娘たちが久しぶりに友だち
に出会って，上記の発話(ウ)をカン高くさげびあっていた。例文(ア)～(ウ)ともに，聞き手
に対するしたしみ，共感，親切心を高い^{こわね}声^{こわね}で示す伝統的な発話形式のひとつといえ
る。わかいテレビ世代の方言ばなれがすすみ，北国らしさが日々にうすらぐ一方，こ
うして，アクセントやイントネーションの面で，いまもふるさとのオト^声《声》が^{かんばら}蒲原平
野の風にのって，のどかにひびきわたる。

1.4. 都市化の波

1947(昭和22)年元旦を期して人口3万4000の新発田市^{が生まれ}が生まれ，1959(昭和34)
年前後から大規模な市町村合併^{がつべい}(当時「ゴ^ッヘー」と読む仁もあった)がすすみ，人
口も倍の6万8146人(1955)，7万3992人(1965)にふえた。

『市統計書』(1961)の広ぼう欄を見ると，東西31.4km，南北24.7km，面積443.
44km²という広袤果てなきところに，現在でも7万8230人しか住んでいないというこ
ともできる。とりわけ会津系の方言を話す旧赤谷村^{あかたにむら}は，山々と谷あいの地域で，遠く
福島県と接する境にひろがるところに，わずか1,161人が住みなしている。総人口の
1.5%にみたない人口だ。市内最大の人口をもつ旧川東村^{かわひがし}でさえ6,515人，8.3%
にすぎない。このような各地区の農村人口は，今後もかなりながく下越方言をささえ
る力として機能するかもしれない。

(9) たとえば^{しろせ}白勢・^{しがや}渋谷・^{しずこ}静子などの名の第1拍だけをのばして，友人(特に女性か)によ
びかける習慣がある。

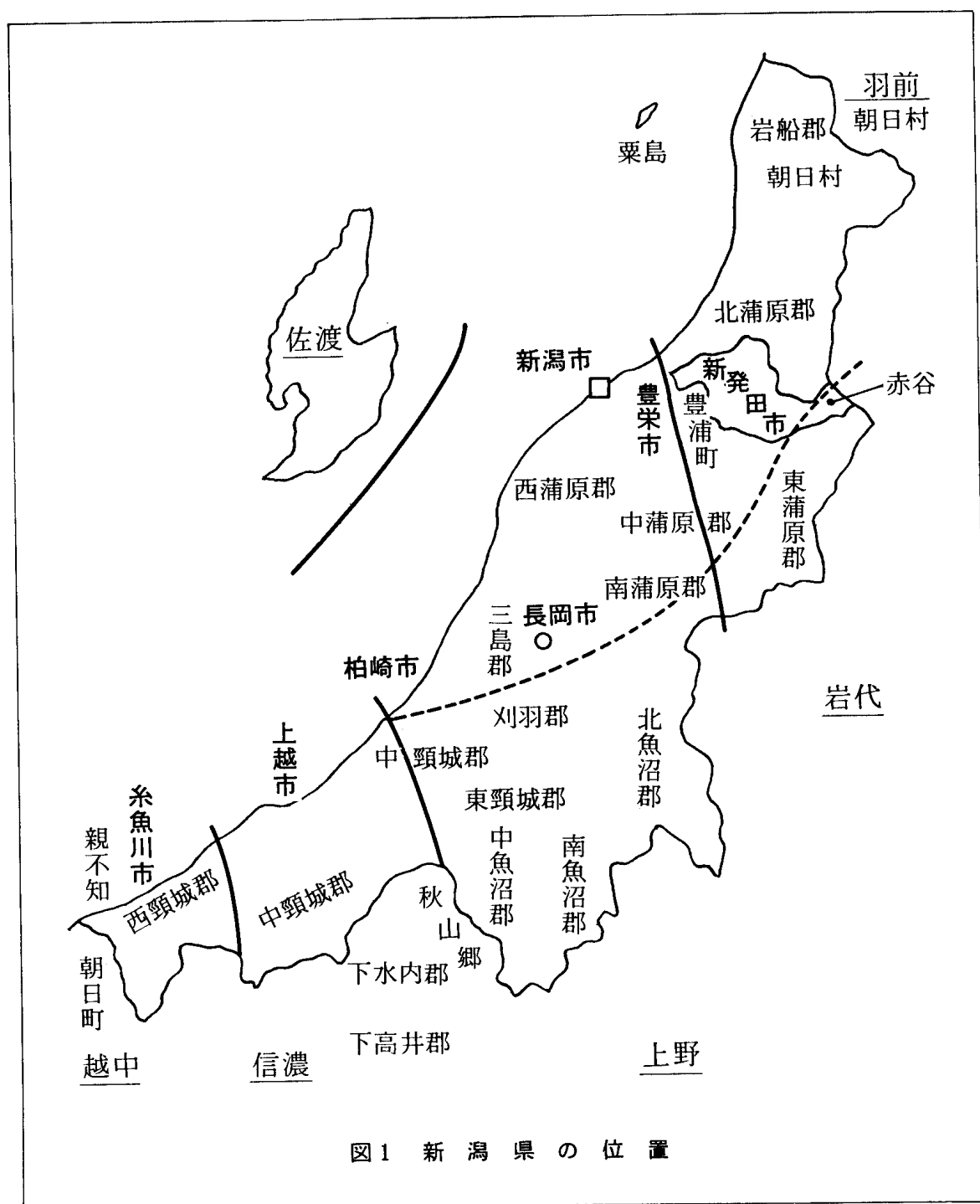


図1 新潟県の位置

市の人口 78,211 人（1985 年 6 月すえ）⁽⁷⁾のうち、45 歳（1981 年国勢調査のとき 40 歳）以上の市民のしめる比率およそ 47%⁽⁸⁾、つまり半数近くにのぼる。しかも、人口の老齢化にともない、中・高年齢層の比率は、わずかであるが、年々大きくなってきている。この人たちは方言の色こくのこる時代を経験していて、いまなお街かどで、発話のはじめを強める独得の口調でもってことばをかわしている。文や句のあたまの 1

(7) 「住登人口一覧表」新発田市市民課

(8) 『新発田市統計書』同市統計課 1981 年

方言、後者のような方言をモーラ方言と名づける。(同書P.13)

この秋山郷方言は、中越方言とおなじく、室町以来のオ段長音開合区別（オー [o:] とオァー [o:]）⁽⁵⁾ をのこしているのので、意志・さそいの形は、キリシタン・ローマ字の長音表記を利用してはどうか。

秋山	^{チコア} cikō (cikoo) 'ociyō
新発田	kikō (kikoo) 'ociyō
東京	kikō (kikoo) 'oriyō

なお、新発田でも秋山でも、母音の長い・みじかいは、音韻上の対立として存在する。「夜」が「アケル」と「用モナ」の /yo/ と /yō/ とは、ちがうことばとして意識される。

1.3. 新発田方言の動向

田園都市新発田の現在の言語生活は、「かがっぽて」や本稿にとりあげたところより、はるかに標準語に近づいて、昔日のおもかげはない。けれども、その日常会話について見ると、岐阜市よりもずっと地方色がこいといえそうである。鹿児島^{ふじつかはま}のいわゆるカライモ標準語といい勝負ではなかろうか。南国交通のバスと新潟交通^{ふじつかはま}藤塚浜ゆきバスの車中の模様の、なんと似たことか。

上越新幹線の上野乗り入れによって、東京から新潟まで2時間という近さになり、^{かんえつ}関越高速道路で3時間である。新潟・新発田間27kmは^{はくしん}白新線の普通列車でも40分ほど、生活万般の変わりようも当然のなりゆきである。全国どこでも見受けられる官庁風漢語・外来語愛用も人後に落ちず、県営のは^{ほじょう}たけは圃場と名のり、市の統計書には「広ぼう」⁽⁶⁾ という欄がある。電話帳の表紙には“SHOPPING PHON BOOK” (< phone) とあり、市内随所に WELLCOME ('welcome' のつもり) の看板が目立ち、岐阜市中の Lady's, Ladies', Ladys', Ladie's (はじめの2例が正しい) と妍をきそうかのようである。JUSCO, DAIEI に対抗して、UOROKU チェーンのローマ字の大看板も目にカガッポィほど。新発田市西どなりの^{とようらまちつきおか}豊浦町月岡温泉の旅館の部屋にも、ARE AKE (有明のこと), HO RAE (蓬萊のこと) というローマ字表示。

(5) 剣持準一郎「柏崎市大字折居字餅粮」資料ほかの表記による。

(6) 広表(東西南北の広さ、ひろがり)

1.2. 下越方言もシラビーム方言

「かがっぽて」では、小文字の「ィ・ォ・ゥ」を利用して、たとえば、タ^カィ [ta(:)]
kaɪ, ta(:)ke(:)]やハ^ッコォ [ha(:)kko(:)]などの語形を表記した。小文字であらわ
される部分は、ふつう、まえの母音とともに1音節となって発音される。タ^カィ, ハ^ッ
ッ^コォ, ヒ^ッドォは、タケ [take], ハ^ッコ, ヒ^ッドとも発音される2音節のことばで
あって、東京方言のように明確に3拍、4拍と切りにくいような感じがする。本稿で
も「かがっぽて」でも、実は、小文字のァ・ィ・ゥ・ェ・ォをともなった音節は、み
じかく発音してもよい長音なのだから、ハ^ッコ(ォ)《ひやっこく》とかア^ッツ(ゥ)《あつ
く》と、いちいち()に入れなくてもいい。ただ、実際の話し方の雰囲気をつたえたい
ので、今後も適宜カッコ入りにしたり、小文字表記のままにしたりする。

動詞の陳述形 id (未然形+ウ) の形 聞^カコォ・来^ヨォ・降^チヨォなども、キ^コデ《聞
こうよ》・来^ヨテバ《来ようってば》・降^チヨカ《降りようか》と、みじかくもなる。
「ォ」は、そのまえの母音[o]にとけこむ。標準語のコーやヨーは /ko + R /, yo
+ R / (/R / は長音をあらわす) と、2拍 two morae⁽³⁾にかぞえられるが、新発田の
コォ, ヨォは、やや長く発音されることもある / 音節 one syllable なのである。

聞^カコォの「ォ」は、音韻論の立場から見ると、モーラ音素 / R / として1拍^{モーラ}の単位
で独立しない、長い母音[o:]の末の部分であろう。はっきりとした「ウ^シロ《＝う
しろ》の半分」にならないでいることが多い。音素記号であらわすなら、/kikOR,
koyOR, 'ociyOR / ではなく、/kakô (または kakog), koyô, 'ociyô / とすべき形態
である。

形容詞語尾の重母音も / -ai (または -aɪ), -ij, -ui, -oj / がそれぞれ1音節で
あって、2拍ではないということである。

『信越の秘境・秋山郷のことばと暮らし』において、編者馬瀬良雄氏は、信州栄村
秋山の方言をシラビーム syllabeme 方言⁽⁴⁾であるとして、つぎのように述べておられ
る。

秋山方言について(中略)少数だが「少し寸詰まりに聞こえる」という答えが
あった。これはこの方言の重要な音韻的性格に言及したものと言える。

(中略)秋山方言では、引き音ー、撥音ン、促音ッは独立した時間的単位を取り
えず、シラブルの単位で分割されるのに対し、東京語や長野県方言の多くはこ
れらは独立した時間的単位を取って分割される。前者のような方言をシラビーム

(3) mora [ラテン語>英語]の複数

(4) 柴田 武氏の命名による。

ツェにもなり、アツチェにもなるのだが、語形として「アツツィ」[ˈattsii]としたわけである。

命令形「来い」は、コ¹ィ koi, コ¹イ koi, コ¹エ koē, ケ¹ェ kē・のあたりをゆれうごく。条件形 za (仮定形) は、ケ¹バ kēba, コ¹ェバ koi ba, クレ¹バ kureba といったところ。おそらくコ¹ィの「ィ」とコ¹ェバの「ェ」とは同じ母音[ェ]と考えられる。しかし、本稿では、意味を言いわけする別々の形態素 morpheme として、「コ¹ィ」と「コ¹ェ(バ)」に書きわけ。前者は、念入りなおももちでいう「コ¹イテバ」《来いと言っているんだよ。来いってば》のごとく、[i] がはっきりひびく場合もある。条件形のほうは、「コイバ」にはならず、一般的な会話では「ケ¹バ kēba」となる。「行¹ク→行ケバ/降¹チル→降¹チレバ/スル→セバ」などに平行させようという意識から出た語形であろう。

s 音をふくむシ・ス, チ・ツ, ジ(ヂ)・ズ(ヅ)の3組6種^{おん}の音は、それぞれたがいに入りみだれること、しばしばではあるにしても、やはり別々の音として認識されている。

$$\left\{ \begin{array}{l} \text{シ} \quad \text{ʃi} \sim \text{si} \sim \text{sü} \\ \text{ス} \quad \text{sü} \sim \text{si} \sim \text{ʃi} \end{array} \right. \quad \left\{ \begin{array}{l} \text{チ} \quad \text{tʃi} \sim \text{tsi} \sim \text{tsü} \\ \text{ツ} \quad \text{tsü} \sim \text{tsi} \sim \text{tʃi} \end{array} \right.$$

$$\left\{ \begin{array}{l} \text{ジ(ヂ)} \quad (\text{d})\text{ʒi} \sim (\text{d})\text{zi} \sim (\text{d})\text{zü} \\ \text{ズ(ヅ)} \quad (\text{d})\text{zü} \sim (\text{d})\text{zi} \sim (\text{d})\text{ʒi} \end{array} \right.$$

「越後獅子」が、ときによってはイツンゴズスになることがあっても、語形としてはエチゴジシ[ˈetʃigo(d)ʒiʃi]でいい。イチゴジュースは新発田語でもイチゴジュ¹ウスである。ただし、新発田のガ行は鼻濁音[ŋ]にならない。市中心部では[ŋgoッゴ]にもならない。エツゴジョンと発音する人はいても、ていねいな発音としてはイチゴジュースである。信越国境の秋山郷のように、あきらかにエツゴジョースとなる規則のある方言はまた別である。

馬瀬良雄編『信越の秘境・秋山郷のことばと暮らし』(第一法規・1985年刊)によれば、信州栄村秋山では、キはすべてチに統合される。新発田でも、たしかにキとチとは混同されることもあるが、音素の組としては別のものと意識されている。キ「キチガイをチチチガイとかキキキガイと発音することはない。筆者が小・中学生であった昭和20年代、

「オレ、キノナ《きのう》 トーチャーニ 行ッテキタド《来たよ》。」

「エー [ˈe:ノ]《まさか》, トーキョー?」といった冗談に興じたものである。市内^{トウチョー}の東町(実はヒガシマチ)と東京^{トウチョー}の語呂あわせである。

雪ございて あべや

— 新発田方言の形容詞 —

竹 端 瞭 一

雪は [jwki ユキ] または [jwkçi ユチ]⁽¹⁾ と発音される。コザクは、岐阜県飛騨の吉城郡^{よしき}にもある雪国専用のことば。命令形ア(ン)べ [ʼa(m)be] も、アイベ・アエベ・アヨベの形で、飛騨はむろん、岐阜市すぐ北の山県郡などでもつかわれる。標題は「ひざほどにつもった雪をふみ渡っておいで」といった意味である。

東條操編『全国方言辞典』序に「とにかく方言集で虐待されがちな名詞以外の語彙については、なるべく多くこれを採集することに努めた。」とある。まえの号の小論「雪かがっぽて — 新発田方言の形容詞」(以下「かがっぽて」と略す)につづいて、ここでは動詞をとりあげるのも、東條先生の指摘されたことを痛感するからである。

§ 1. 下越・新発田方言の現状

1.1. 振幅の大きい方言の音声

筆者の現在住んでいる濃尾^{のうび}地方では「ヒンデ寒ィ」ことを「どえらい寒い」というがその実際の発音は、正当派の [dɸ:ræ samy] (ドイツ式のローマ字なら、'dörä samü' に近い) から [de:ra: sami:], そして「標準語音」の [doerai samui] まで、いろいろにゆれている。新発田方言の発音も、地域、世代、個人によるゆれ、標準語から受ける影響などのために、話されるたびに、かなりの違いが観察される。したがって、その都度音声記号のように忠実にうつしては、かえって構文論の要素としての形態 morph がとらえにくくなる。拙論「かがっぽて」において、形容詞語尾の重母音⁽²⁾を、アイ・ウィ・オイのように小文字を使ってあらわしたのも、書かれた語形をできるだけ固定するためであった。実際の話しの中では、「熱(アッツ)ィ」は、ときにアッ

(1) 完全にユチ [jwɸçi] になる人もいるが、ここでは口蓋音化のはげしいキを kçi の記号で示してみた。

(2) 「かがっぽて」で diphthong を「複母音」としたが、糸井寛一氏の助言により、「重母音」にあらためる。